

---

# BL小説（タイトルが決まらない）

たにぽん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

B.L.小説（タイトルが決まらない）

### 【NNコード】

N3606Q

### 【作者名】

たにぽん

### 【あらすじ】

主人公、水原香月が通っている

花崎高校は男子高、全寮制の高校。

恋人はほしいが、全寮制のため彼女は作れないに等しい。

高校生活を楽しんでいる所に

アイツが出てきて香月の高校生活が・・・？

## 1話（前書き）

初めてのBL小説を書きます。

馴文、馴作ですがそれでもいい方はどうぞ見てください。

性的なことが含まれるため苦手な方は回れ右でお願いします

俺は水原香月、高校1年

今日は花崎高校の入学式

花崎高校つてのは俺がこれから通う高校だ  
男子校で全寮制つて言うのが傷だけど  
家からは徒歩15分でつく。

俺は大人数より少人数・・・1人とか  
少ない方が好きだ、はつきり言って1人のときの方が好き  
口下手だから話すのも絡むのも苦手。  
それに性格は超、地味。・・・だと思つ。

それとは逆に、見た目はそちらの男子に比べると  
可愛い方つてみんなから言われるし  
顔もすつごく明るい感じだ  
地味つてのが全然分らないくらいに。

身長も低くて159センチしかない  
小柄な体系で体力もあんまりなくて  
声も高め、その拳句仕草がなぜか女の子みたい  
もう高校にもなったのに近所の人には  
『香月君つて何歳だつたけえ?』って言われる。  
さすがにちょっと重症だ。年齢すらわからていない。

彼女は、もちろんほしいけど

男子高だし、全寮制つてこともあって

彼女なんて作つてる暇もない。

まず、出来たとしても弟か年下に間違われるに決まつてゐる。

そんなことを考えていると

”ドン”と誰かにぶつかった。

「つてて・・・、すいません」

そういうて見上げると俺と同じ高校の制服を着ている男子が立っていた。

「……女？」

「……はあ？」

「だから、お前女？」

今、一番聞きたくない言葉が聞こえてきた。  
もう一度確かめる

「えつと……？」

「だーかーらあ、お前女か？って聞いてんだけだ」

「……つて言つた？」

「は？ 聞こえねえんだけど」

「今、女つて言つたよね？」

「ああ、そうだけど？」

あー、何かやつかいな感じだぞ、このうのが一番キレイだ。

「女つて言つたな！ 一番聞きたくねーんだよ！」

そういつて俺は走つた、あいつの視界から消えるよつ。

「女つて言つちや悪いのかよ、あんな面しやがつて。」

そんな言葉は聞こえるはずも無かつた。

「はあ……つ。」

体力が無いせいなのか、すぐに息が荒くなる。  
校門がチラリと見え小走りで校門に向かう。

ふいにその時に足がガタついて体が揺れる。

「あ……。」

こういふのはいつも通りだ。

息が整つてないのに走り出すといつもいつもなる、いつもこのまま慣れっこだ。

どうせ氣を失うんだもん。

その時誰かが俺を呼んでいた・・・様な気がする。

「大丈夫か！？・・・おいつ。

」

校門の前で俺は倒れた。

目を開けるとそこは室内だつた。

「いたたた・・・、口口は・・・。」

頭を抑えながら体を起こす

「お、目覚ましたか

そこにはアイツが立つていた。

「おっ、お前！…！」

「それにしても・・寝顔？本つ当女みたいだな。」

「だから、女じゃないていつてるだろ！お前は人の嫌がることをするのがすきなのかよつ！」

「好きですけど何かー？」

「うつわ・・・、趣味悪いな。」

「あ、後　お前、お前っていうな。

俺には石川<sup>いしかわ</sup>真人<sup>まこと</sup>って名前があんの。俺のこと真人って呼べよー」

「で？お前の名前は？」

「水原香月。」

「うわ、名前まで・・・・・・」

「女みたいつて言つなよ。」

アイツ・・・石川が言つ終わる前に言つてやつた。

「チツ、言いたかったのに。」

「言つても意味ないだろ」

「そりがー？可愛くていいとおもうんだけだなー。彼女にしてやつてもいいぞ。」

「なつーお、俺は男だ。それにちゃんとつこつこするもんはつこてんの。」

「愛があるなら関係ない・・・」

「ふざけるな、お前と付き合いつもりなんかないぞ。」

「かわ、おま・・・石川なんでこの部屋に居んの?」

「あ、言つ忘れてた。香月と俺一緒に部屋なんだぜ?」

「げつ・・・まじかよ。あー、それと、下の名前で呼ぶな。」

「いいじゃん、俺の好きにさせよ」

「あー、面倒くさい、もうどうでもいい向でも勝手にしてよ。」

「何でも勝手に・・・?」

「ああ、もうしらねー」

「言つたぞ、お前何されても文句言つなよ。」

「言わない、言わない。もうつるさいから静かにしつけ・・・」

そういつて、ため息をついて目を閉じた。

その瞬間に俺の唇に何かが当たった・・・?

「んつっ!??/??/??/??/?!」

俺は目を見開いた、目の前のそこには石川の顔があつたから。  
ちよつ・・・・!「イツは何考えてんだ!?俺は男だぞ!!  
・・・・・、それでも・・・いくらなんでも・・・・・!」  
・・・・・、それにして石川つて以外に顔立ちきれいだよな・・・  
つて何に考えてんだ、俺!」

そんなことを考へてると石川が俺の唇から離れた。

「何してもいって、勝手にしつけて言つたのはお前だぞ?  
「で、でも・・・いくらなんでも・・・・・!」  
「可愛いからいいの!」  
「つ・・・・。」

今の俺の顔は多分真っ赤だと思つ。何にせよ初めてのキスだつたらな。

「・・・つて、え!?初・・キス・・・俺のファーストキスがあ  
あつ!?!?どーしてくれんだよ!」  
なみだ目ながらに石川に訴えた、すると  
「いやー、何しゃべつてもお前は可愛い。」

と、熱心に語りだした。

ああ・・・これから俺の生活は一体・・・。

あれから何日が過ぎて、石川とは何とかやつてきている。

でもひとつ面倒な事が増えた、それは毎日

「キスさせてよー？」

つて言つてくる。それに対しても俺は

「うるさい、どつかいけ。」

で終わらしてくるけど・・・

まあそんなことはおいといて何故か今日

「酒飲むぞー！」つて事になつた、もちろん俺は飲まないけど。

「あのさ、思うんだけど・・・寮で酒なんか飲んでもいいわけ？見つかつても俺はしらねーぞ」

「大丈夫、大丈夫！」

と、いつもに増して上機嫌に返事をしてくる。

まあ、コイツと話してる事自体が疲労になるからほつておこう。

そして、いつのまにか夕方・・・夜か。

夜になつていた

ガサガサとビニール袋の音を立てながら石川と石川の友達は入ってきた。

俺はまだ友達は出来ていない、というより作りたくないだけだ

それに比べて石川はもう何人か出来ている。まあ、その前に俺は大人数とか

嫌いだし・・・。

そんなことを考えてると部屋に2人ぐらい入つてきた。

「おー、コイツが真人の言つてた水原かー。ん、確かに可愛い。」

なんか勝手にコメントをしている。

もう1人の男子も頷いている

何故か、気分が悪くなつてきた。俺は石川に  
「ちょっと気分悪いから寝てくる。」

と一言だけ残して、寝室・・・といつても隣の部屋だけど、  
そして俺はベッドにダイブ・・・といつより飛び込んだ。  
仰向<sup>あおむ</sup>けになつて天井を見た。

ちなみに俺と石川のベッドは2つに別れている。

部屋の両端に一つずつと荷物を置く感じになつていて

ふとんがちょっといい感じの温度になつてきて、まぶたが重たくな  
つてきた

それが心地よくウトウトしてくるとだんだん眠気が襲つてきていつ  
の間にか寝ていた。

## 5話（前書き）

真人くんがー w笑

書いている自分までにやけてしまう・・・。  
おかしいでしょか、こんな私つて。

目が覚めて、ベッドから降りる。

「結構寝てたんだ・・・俺。」

すると目にいたのは完全によけてゐたお二二石川が机に顔を伏せていた。

お い し 。

そーーと 起きるが砾がると

それにも・・・酒臭い、酒臭すぎる・・・

おお前、渾身い 口笛のノ、ナニリ わケルかし

「そんなの、アハでもない感じやん」

て真剣な感じだ。

そういうと、石川はいさりにむかって歩いてきていた。

たら危ないだろ」

そした、危ない。いかにも被害者たるやうに、口を塞ぐ。

もう、寝て欲しいし・・・、隣の部屋に連れて行く。

「お前もう寝とけ」

そういうて俺も寝よ。」  
と思い自分のベッドに向かおうと振り向いた瞬間に

石川に腕を引っ張られた。そのおかげで俺は石川の上に乗つて、仰向けになつてゐる

「はあ・・・やめりよ、お前」

そういつて石川のほうを向くと頭を思いつきり石川の方に引かれて俺の唇と石川の唇が重なつた。

「ちよ、お前つー！ 何してんだよつー！」

照れながら俺は一瞬にして石川の唇から離れた

「照れてるお前、可愛い」

そう言つて満足げに言い、そしてまた俺に口づけた。

「つ・・・お、前！・・・やめりつー」

不意に口が開いた、その瞬間に舌が入つてきた

「・・・つ・・・はあつ・・・や、め・・・つー」

一度唇が離れる。

「へえ・・・、お前つて声までかわいいのな

「そ、そんな事言つ・・・」

『言つた』と、言い終わる前にまたキスをされる。

「・・・ふ・・・あつ・・・やめ、りつー」

石川の舌が俺の舌をあたつてくちゅくちゅと濡れた音が漏れる。

## 5話（後書き）

（作成中・・・、次話に続きます）

## 6話（前書き）

真人くん大胆だわあ w 笑

でも、個人的に水原君 LOVE です w

友達には真人くんの方が好きッていわれてるんですけどね^ p^

「そんなんに、俺の事嫌いか?」

石川が唇を離して聞いてきた

「そ、そんなんの・・・。

俺は男なんだぞ・・・?男なんか好きになれるわけないじゃ・・・ん。

「今俺の顔は石川に見せれるよひなもじやないと判断して顔を横に向けた

運良く、部屋が暗くてよかつた。と安心する。

「・・・もう・・・いいだろ、こんなまね一度とするな。」

そうじつて石川の上から降りて自分のベッドへ行く。

ベッドに乗りうつしたその時石川が俺の肩に手をのせた  
「・・・まだ何か用があるのか・・・?」

そうじつて振り向くと、今度は俺のベッドに押し倒された。

「ちよつ・・・やめうつ!またあんなのするのかよ!俺はいやだから  
な・・・離れうつ!」

俺は石川にそうじつと、何故か石川が一瞬笑った。

「へえ・・・?口答えするんだ・・・」

その言葉を聞いた瞬間背筋がゾットするのが分った

「・・・なんだよ。口答えして何が・・・何がわるいんだよー。」

強気になつていたものの、内心はちよつと怖かつた。

「何?なみだ目にでもなつて俺を誘惑してるわけ?」

石川が言つたときに気づいた、なみだ目だつたんだ。

「そ・・・んな事するわけ・・・、無いだろ・・・?」

声が震えた。

「お・・前・・・怖・・・い・・・。お前は・・石川じゃない・・・。」

「

「俺は、石川だぜ？石川真人の何者でもないさ。」

そういうと、石川は俺の肩をつかんで体を起き上がらせた。内心ホッとしたその時だつた。

また口を塞がれ、口内を荒らされる

「んんっ！…やめっ…ふつ…・・・あ」

頸あいづかを？んで、上を向かされた

石川の舌が入りやすくなつたのかいまさつきより激しく口内を荒らされる。

「んっ・・・・・あっ・・・」

唾液が俺の口元から頸にかけて流れしていく

・・・なんだか、抵抗するのもバカラしくなつてきた。

もういいか、と思い俺は石川のされるがままにしておいつと  
思った、その時に口を離された。

まるで、俺が抵抗するのを止めたことを分つたよひ。

「面白くない。」

そう言つた限り、石川は自分のベッドへ向かつて行つた。

「・・・・・んだよ、なんだよ…今せつままであんな事してやがつた  
のにつ・・・・！」

いつの間にか俺は泣いていた、何でだろう。石川なんか放つておけばよかつたのに

「待てよ・・・！」

「・・・ 何だ？ 文句か？ 文句なら聞かないから。」

「・・・ 文、句は・・・ 無いけど・・・ つ！」

「じゃあ、何だ？」

と、冷たく言われた。 そんな言い方されたら・・・  
「・・・ つ。 もう・・・ いい。」

俺はベッドに上がる。 すると石川の声が小さく呟いた  
「かつ・・・ き・・・ だ」

最後の辺りは消え入りそうな声だったので聞き取りにくかった。

明日は・・・ 起きたくない。 いや、もう起きたくない石川の顔も見  
たくない

・・・ なのに、目を瞑ると石川の顔が浮かぶ。  
嫌で嫌で、嫌なのに何故か顔が浮かぶ。

その日の夜、俺は頬を涙で濡らしながら寝た。

俺は、次の日何故か早く起きてしまった。  
まだ朝の・・・5・17だ。

なんだか、今日は早く部屋を出たい気分だ。  
朝食を軽く済ませて部屋を出た。

俯いて寮の廊下を歩いてると誰かとぶつかった。

「・・・すいません。」  
そういうや、石川と出合つたのもこんな感じだったな・・・。  
つて、石川のことを考えるのはやめよう。

「大丈夫？君」

「え？あ、はい。・・・すいませんでし・・た。」  
氣の抜けるような返事をして、学校に向かおうと  
歩こうと思つたらそれを察知したのか  
「ねえ、僕暇だからちょっと付き合つてくれない？」  
「え・・・？あ・・・俺でよければ付き合いますよ。」  
「有難う」

そう二二二とした笑顔でいわれると、手を握られた。  
「えつ・・・？」

そういうと、氣が付いたように  
「あ、ゴメンゴメン、嫌だつたよね。」  
と、困つた顔をした

「あ、いえ、全然平氣ですよ。」  
あせつて、そういう返事をした

すると、その言葉を待つっていたかのように

また、俺の手を握った。

手を握られている間は不思議な事に右三の事は忘れられた

連れてこられたのは、学校の敷地内にある温室。

「ここ・・・」

「うん、温室。こいつて落ち着くんだよね。」

「俺は・・・始めて・・・何か、落ち着く・・・」

「そりそり、自己紹介忘れてたね。僕は2年の柴田瑞樹、じはたみずき

「

「はい、ひかり・・・俺は1年の水原香月です。」

温室にある、ベンチに俺たちは腰を掛ける

「いい名前だね。」

突然言われて、ビックリした。

「・・・いい名前なんかじやありませんよ。」

「・・・顔だって女みたいだし、それに名前も・・・」

「そんなこと無いよ、いい名前だしそれに顔も可愛いじゃん。僕は

そういう男の子好きだよ?」

「そんなこと言われたのはじめてだった  
なんか、心が温かくなつた。」

「はあ・・・・・。」「どうしたの？ため息なんかついたやつてえ」「あ・・いえ、気にしなくていいですよ。」「そんなこと言わるときになるじゃん？」「あ・・はは・・・・先輩つて何か・・その・・・のんび~りした感じですよね。」「う~ん、うのかもね。って今、話しそうしたでしょ。」「まあ、そこは気にしちゃいけないシスよ」「まあね」「まあね」

なんか先輩と話してると気が楽だな・・・。

「先輩と話してると気が楽になります」

「うう？でも嬉しいな。でも、気が楽になるって事は・・何か悩み事でも？」

うつ、痛いところをついてこれらた・・・。

「まあ・・・無いつて事は無いんですけど・・・。」「あ~とー敬語やめみつまー、何か気が重いよ。タメ口、タメ口ー。」「え・・でも・・・。」「いいのー先輩命令ー後、僕の事は瑞樹でいいよ。」「先輩命令つて・・・、でも先輩はつけさせないださーよ。」「ん~、まあいいか。じゃあ、僕は番号つて呼ばせてもらひつよ。」「は、はい・・。」「アウト」「アウト」「へ？」

「ん~？だから、敬語使つたつからアウト」

先輩は考えたよつた顔をして言った

「え・・・・・? アウトツハ? 句するんですかー?」

「2アウト」

「うう。」

「へし・・・ナリベルか、だつたらタメロで話してやるひ、さんかー。」

「わ、わかつ……たよータメ口で話せばいいんだろ……？」

「うそ」

楽しげに笑みをこぼらに向けながら返事をしていく

「やつてやううじやん。」

「うんうん。いい子、いい子」

そういうて、俺の頭をなでてくる

「あの……そ、名前は？み・・ずきじやないとだめ？瑞樹先輩じやだめ？」

「だーめ、タメ口で話してんのに先輩はダメだろ？」

「チハツ、まあいいか。わかりましたよーだ、瑞樹せ・ん・ぱ・いつ。」

「ん~、まあいいか。でも基本は呼び捨てだからね？」

「はいはい。」

何か、自分で驚く。こんなに話せる奴だつたんだ……俺

「じゃあ、もうすぐ予鈴なるし校舎行こうつか。」

「え？ああーほんとだ！」

「じゃあ、そうと決まれば早く行くよー！」

そういうて瑞樹は先に走り出した。

「ちよ、まつてよー俺走つたらまた……。」

聞こえて無さそうだ。まあいいか、気を失つたらそれはそれで、楽だし。授業受けなくて済むし。

俺は、走つて追いかけた。

「はあ・・・つ、はあ・・・ま、つてよ・・・。」

「もう、息切れ？」

「俺はつ！運動神經ないつ・・・の・・・だから次は走らないで、また氣を失う・・・から。」

「ん？氣を失う・・・？」

何故か口の両端を少しだけ上げて、また走った。

「え？なんだよつ・・・？ちょ、待てつ・・・て・・・つ」

また、俺は走る。

「あー、もう無理だ。」

足に力が入らない。入学してから8日目、また俺は氣を失った。

「へえ・・・、こういうことか。」

氣が遠くなる前に聞こえた一言・・・瑞樹の声か。

そのまま、俺は氣を失った。

ネタが出てこない……（汗

「う・・・、アレルギー？」

どこかのベットに寝転がっていた

「僕の部屋」

そういって瑞樹が俺の田の前に顔を出した。

「うわっ！－ビックリさせるなよ！－！」

「そういや・・・

「あのや、俺が気失う前に”じつこいつ”とか”って言つたよね？・・・  
・アレは、どういうことですかー？」

多分、俺は今引きつった顔で瑞樹に問いかけてると窺ひ。

「うーん、試したみたいな？」

「勝手に、実験材料にするな。・・・そういうの部屋もつ  
1人いの？」

「あー、ここね、僕1人なんだ

「え？まじ？いいなー。」

「だから、何をしてもいいってわけ」

「何してもいいって・・・、一応ココ寮だよ？共同だし。」

「まあ、そういう意味では何もしていいことじやないけど・・・  
。」

「と、ブツブツ独り言を言つていろ

・・・？ん？待てよ

「どういう意味？そういう意味では、つて・・・？」

「ん、深く考えちゃダメだつて。」

「・・・う、ん。そう・・・だよな」

「うん、そうそう。」

何か、嫌な予感が・・・。

「それに、僕は我慢強いタイプだから  
ん？瑞樹は一体何をいつてるんだ？  
何を言いたい？」

「・・・どういう意味？」

「もー、香月は鈍いよね。」

「・・・鈍くて結構。・・・スマセンでしたねーだつ。」

「もー、ほんと可愛いよねー。香月は」

「そうじつて俺の頬ほっぺたをつまんでクニクニしてきた。

「いつへーひや、ひやへひよひよ（いつてーな、やめなよ）。」

「お人形さんみたい、可愛いー。」

「おはへはほんはは（お前は女か）」

「ん〜、まあ環境が環境だしねー。」

「ふーん。・・・今日は口口で寝かせてもらひよ

「いいけどー。何かあつたの？」

俺は自分の頬をさすりながら言った。

「うーん、同じ部屋の奴と喧嘩した・・みたいな感じ?」「ふーん・・・どうも嘘っぽいね。喧嘩なんかしてないでしょ。」瑞樹の顔が少し、真剣になつたのが分る。

それにもしても、つづづく思つけど瑞樹つて変な所に勘がいいよな・・・。

「・・・で?何があったの?」

「え・・・?・・・べ、別に・・・。」

同じ部屋の奴にキス（ディープキス）をされた。なんて軽々言えるわけねえよな・・・。

「何?何か嫌な事されたの・・・?」

「嫌な事・・・って言つたら嫌な事だと思つけど・・・、瑞樹にはいえない・・・かなあ?」

「僕に聞かないでよ。疑問系にしないで。返事できなーじやないか。」

「あはは・・・。」

「笑う所じやないと思つよ。僕は香月のために聞いてるんだから。ふざけた言葉が嘘のよう、とっても真剣な顔で聞いてくる。」

「・・・言えば・・・いいのか?」

「うん、そいつが嫌なんだろ?その時は僕が助けてあげるから。僕を信じて?ね?」

「・・・うん。ん~・・・言いにくいくらいだけど・・・や。」

「大丈夫、香月のタイミングで言えばいいから。」

「え・・・?」

「それまで、ここで何かしようよ。」

そういうつて、急にいつも通り（?）の明るさに戻つた。

「・・・瑞樹つて何か雰囲気変わるんだな。」

「・・・ん? 何か言つた? それとも・・・まあいいか。」

「う・・ん、ゴメン。やっぱなんでもない」

まあ、いいか、気にしないでおこう

「みず・・・あ、やっぱ俺寝るわ。」

「えー、面白い。まあ香月の体調もあるしね」

「うん・・・、ゴメン。・・・あ、ベッドでしつたらいい?」

「ん? 入って右側使いなよ。」

「うん、有難う。」

瑞樹に言われた通り右側のベッドに俺はもぐった

(なんか、体がだるい。・・・何も考えないでおこう)

そつ思い布団を顔の近くまで上げて・・・眠りについた。

なんだかいつも以上に布団が温かい。

寝返りをうつてから目を開けると目の前に瑞樹の顔が・・・

「・・・ん? み・・・ずきい! ? ? ?」

「あー、ん? 何? それより耳元で騒がないでよ。寝てたのに・・・」

「・・・寝てたじやねえよ! ! なんでお前ここにいんの! ?」

「え? だつて僕のベッドだし・・・。」

「いや、お前コツチで寝ろって言つたよな。」

「うん、もちろん。そのつもりでもいたし。」

「はあ? ? 俺と瑞樹は兄弟じゃねえんだぞ? ? ?」

「いいから。ココで寝てる。」

そういうつて瑞樹は俺の頭を自分の胸の辺りに持つていつて抱き合つてゐるといふか・・・、腕枕みたいな状態になつてゐる。

「ちよ、やめう・・・つて!」

「いい子なんだから静かにしなさい。」

「……。」

「なんだあ、できるじやん」

「・・何か瑞樹つてお母さんみたいだよな・・・。」

「よく言われる、もうちょっとここで休んどけよ

「うん・・・。」

（何か・・・瑞樹の方が気が楽だな・・・。）

「・・・ス、されたんだ。」

「え？」

「・・同じ部屋の奴・・石川真人つて言つんだけど・・・。」

「うん」

「そいつにキスされた。」

「はあ？まさか、それが原因？」

「・・なんか悪いかよ。」

「いや、別に。可愛いなって思つてさ。」

（なんだよ・・・。）

「調子狂うじやん。」

瑞樹はフツッと鼻で笑つて俺の頭を撫でた

「俺を子ども扱いするな」

「え？僕のことをお母さんみたいって言つたのは誰かな？」

「ふん。・・・・・・もう少し・・口々で休む。何日かお世話になるよ

「はいよ。好きなだけここに居ればいいよ

「俺学校には行かないから。ずっとここで休んでおくべ

「よし、じゃあ先生には僕が言つておくよ。ちなみに僕は生徒会長

なのダ

「は？」

「ハハヤー、ハハニ決まつてゐじやん」

そのまま番円は黙りにひいた。

「ほんと、君は可愛によネ。反則だよ」  
とつぶやいた言葉は聞こえるがまもなく。。。

「もう朝だぞー、起きる」「ん・・・・? 後・・・・10・・・・30分」香円の本心は30分どころかそれ以上寝たいと思つてゐる

「・・・起きないとキスするだ」

突然の言葉にびっくりする

「はー? ふむけんじやねーよ、・・・起きればいいんだろ、起きれば

「そうじう」とー

「あ、俺今日学校休むつて言つてたじやん  
んー、そうだけど。」

もつ寝かせてくれ、と瑞樹に頼む。本当に体がだるい。  
まあいつか。と一言のこして瑞樹は部屋から出て行つた  
・・・と思つたが思いついたドアが開いた。

「かつつきーーちょっとお前にーーいいこと思ついた

「はあ?」

「いいからー」

そういうつて、瑞樹は香円の手を握つて引つ張つていつた

「で? 何故に温室?」

「さて、何故でしようか?」

? 学校始まるまで雑談

? 僕がサボつてずっと雑談

? ・・・・・ほーつとしておく。で、雑談

「・・・どんだけ雑談好きなんだよ」

「んー、楽しいし」

「じゃあ、全部とか？」

「・・・全部だつたら最終的に僕がサボる事になるよ?」

「・・・もしかしてそれが狙いだつたのか」

「んー、違うつてことじやないけど・・・」

「あつてんじやねえかよ」

しゃべりながら、俺たちは温室にあるベンチに座つた。

「・・・そういうや、瑞樹つて彼女とか居るの?」

瑞樹は鼻で笑つてから言つた

「」の僕が、彼女を作るども?」

「うん。思つよ?だつて瑞樹つてかつこないしや、絶対もてるでしょ?」

「・・・そんなことないよ。僕には好きな人も居るけどそれあ  
「じゃあ、告ればいいじやん。瑞樹顔もいいからOKしてくれるん  
じやない?」

「顔もつてあんた・・・そこは性格もつてこれなきや

「ハハ・・確かに」

・・・何かこんなに楽しく話すのつて何年ぶりだろ。

「どうしたの?顔色悪いけど。」

「そんなことないつて、・・・それより告れよつ!」

早めに取つておかないとその子に彼氏できるかもよ?」

「・・・確かに。あの子がとられちゃつたら僕悲しいけど。今もどう  
れないようにしてるし?」

「へー、どうやつて?」

俺が聞いたとたん、明らかに瑞樹の顔が真剣になつた

「教えて欲しい?」

「え？ ん？、どんな見た目が、とか・・・」

「見た目？・・・目がぱっちりしてて・・・肌がちょっと白べこ・・・」

「・・・うん。」

俺は何故か真剣に聞いている

「・・・やっぱり、特徴を言つより・・・見に行つた方がいいよね」

「え？ こんな朝早いのに？」

「うん。」

瑞樹は即答して、俺の手をつかんで走り出した

走つてゐる途中、どう考へても寮に向かつてゐた

「・・・寮にいるのか？ そいつ。」

「・・・つていいのかな？」

「瑞樹の好きな人つてさ、まさか男とか？」

恐る恐る聞くと

「うーん、まあそんなんだうつね。僕には可愛い女の子にしか見えないけど」

ついたよ、と言われ部屋にはいるとそこは瑞樹の部屋だった

「は？ 瑞樹の部屋？」

「うん、ああいいからついてきて」

何故か洗面所に俺を連れて行く

「・・・？ 鏡・・・・・・・？」

「うん、」

そついつて瑞樹は鏡から離れて

「・・・・・今鏡に映つてる人だよ？ 僕の好きな人。」

「・・・は？ 僕？」

「うん。香月」

「はあ？ なんで、俺？」

「香月が可愛いからに決まってるじゃん？」

「う・・・、可愛いっていうなあ」

「でも、まさかこんな告白の仕方になるとはね」

「・・・」

俺はいまいち状況が飲み込めない

「・・・嘘とかじやなくて？」

「何が？」

「俺の『』と好きっていうのとか・・・」

「嘘じやないよ。大真面目」

## 1-5話（後書き）

- ・・・最近会話文が多い

・・・よしーー！」は深く考へないでおこう  
「・・・話変わるけど、俺明日学校行くわ。もう自分の部屋にも戻るし」

「そつか、香月がそうしたいならいいけど・・・  
嫌な事とかされたりしたら僕が守つてあげるから、いつでも待つてるよ」

「守るって・・・大袈裟だな」  
「うん、大袈裟なのが僕の取柄だし」

「大袈裟なのが取柄だったのか、初めて知つたぞ」

そういうと俺は

「じゃ、俺今から部屋に戻るから。」

「うん、わかった」

そつと聞いて俺は部屋を出た

「・・・石川怒つてるかな・・・。」

俺はフッと鼻で笑つてからドアノブに手をかけて  
部屋にはいった

「・・・香月。」

「あ、ああ。石川・・・。」

・・・なんだ！」の空氣一氣まづすぎるが

「どー行つてたんだよ」

「あー、うん。知り合いの人の所。」

「心配したんだからな。」じつちのみにもなれ

そういうと石川は俺を抱きしめた

「あ・・・・・。な、何し・・てんの・・・・?」

「いいから・・・」

「よくない、つい…」

「黙つてろ」

すると、石川が俺の肩を掴み

俺の彫を黒くて真剣に見てきた

卷之三

石川は答へもせずに俺が戸惑っている隙にギスをしてきた

117

「おめでとう！」

俺は石川の胸を思いつきり両手で押した。

今やつ老弱に困つて老いたばかりだと

# 俺は部屋を飛び出した

俺は逃げながら瑞樹に電話した

「瑞樹つ・・助け、て。部屋に入れて・・つー

『何があつたの！？』

「今は話せない、から。部屋・・つー

『わかつた。』

そういうやり取りをして、俺は電話を切つた。  
石川が俺を心配した様子で追いかけてきている。

俺は瑞樹の部屋まで全力疾走していると

部屋の前で瑞樹が心配そうな顔をして待つっていた

「み、ずきつ！」

俺は瑞樹の胸に飛び込んでいった

「はあつ・・はあつ」

「まあ、とりあえず部屋に入つて。」

「う、ん・・・」

後ろを見ると石川が立ち止まっていた

「ぐ、るな・・つー俺に、近づくな・・・つー

「か、つき・・・？」

「俺にしゃべりかけるな・・・」

すると、瑞樹は理解したように口をはさんできた

「へえ・・・君が香月の事傷つけた石川真人くん？」

「傷つけたって……？」

「趣味が悪いね。香月の気持ちも考えてあげたりひとつなの？」

「行い、香月。と言われ俺は頷いた。

部屋に入ると

「大丈夫？また、何かされたの？」

俺は泣きながら言った

「う、ん……つ。」

「なくほどいやな事？」

うん と言つたつもりだったけど声が出なかつた

「そりなんだ、大丈夫。僕が守つてあげるつて言つたでしょ？」

「……つ、ありが、とう……。」

「香月を守るのが僕の役割なんだから。・・・顔上げて？」

「・・・何？」

「そんな田で僕を見上げないでよ。理性がたもたなくなつちやうよ  
「だつて・・・顔上げろつて言つたの瑞樹じやん・・」

「まあ、そりなんだけどね。僕はあいつみたいな趣味ないから、香

月がいいつて言つままで待つよ」

「何か変な事に巻き込んで悪かつたな・・」

「ううん、香月の役に立ててうれしかつたよ?」

「・・・ありが、と。」

俺は何故かわからぬけど瑞樹に抱きついた

「・・・はは、まさか香月がこんなことしてくるなんて。」

「黙れ・・・、今はこうしておきたい気分なんだよ。」

「はいはい。」

そういうつて俺の背中を撫でてくれた

「……熙。」

「じゃあ、寝たらいいじゃん。」

「… そうだけど、何か寝たくない」

「何で」

「だつて……何かあつたら嫌だもん」

「んー、じゃあ温[室]に行こつか」

「うん。」

いつもとは違つて、俺の方から手を繋ぐ

「何か、香月積極的だね」

「うるさい。」

内心本当は怖かった。瑞樹が俺から離れていくのが  
好きとかそういうのじゃなくて……、昔みたいにはなりたくない  
から。

そんなことを考えてこみると温[室]にしついていた

「ベンチ、座る?」

と瑞樹が言つてきた

「ありまえじゃん」

と適当に返答した。

「俺から・・離れたりしないよな?・・とか行つたりしないよな・・  
?」

「・・・・瑞樹。」

「ん?」

「俺から・・離れたりしないよな?・・とか行つたりしないよな・・  
?」

「……どうしたの？ 急に」

「俺つて強がつてただけなのかも」

「俺な、昔・・・・・つ・・・」

思い出そうとするとい、頭が痛くなる

「・・・嫌な事は無理に話をなくていいから。」

「うん、ゴメン・・・・・」

「ううん」

「・・・絶対に、俺から離れていかないよな？」

「うん、離れないよ。何があつても」

「そつか・・・、ありが・・と」

安心したのか俺は気が遠くなつていった

「・・・離れ、ない・・・で。」

最後にそれだけ言つて眠つてしまつた

・・・ここはどこ・・・?

”独りぼっち”の世界。誰も居ない

瑞樹も・・・誰も居ない。

離れないつて言つたのに・・・瑞樹も俺から・・・。

目が覚めるとそこは暗かつた。

「・・・ここどこ・・?」

「・・・あ、番用。おきたんだ」

「瑞樹・・・?」

「うん? どうしたの?」

「つ・・・瑞樹い・つ」

俺は泣きながら瑞樹に抱きついた。今日何回泣いただろ・・・。  
「もー、そんなに泣いてたら可愛い顔が台無しだよ?」

「つねせ、い・つ・・・」

「・・・それにしても悪い夢でも見た?」

「え・・・? 何で?」

「<sup>うな</sup>麌されてたよ。」

「ま、じで・・・」

「まじ、で・・・どんな夢だつたの?」

「・・・何か、皆居なかつた。俺、独りだけで・・瑞樹も、誰も居なかつた。

また・・見捨てられた・・・。瑞樹が離れないって言つたのに・・・

「・・・そつか。ゴメンな」

何故か誤られた

「え・・? 何で誤るの・・・?」

「夢の中の僕、悪い奴だよね。香月から離れないって言つたのに

「・・でも、それは俺が見た夢だし・・・。」

そんなこと関係ない。という風に話を進めていく

「大丈夫。僕がちゃんと守つてあげる。香月のこと離さないから」

「うん、ありがと・・・」

「だから・・・僕にしたら?」

語尾になるに連れて小さくなつていく声が聞こえなかつた

「え? なんて?」

「ううん、なんでもないよ」

そつこつて、どこか寂しいような笑顔を向けられた

「・・・うん。俺、瑞樹の事好きだから。」

「・・それって友達として、じゃなくて？」

「友達としてだよ。・・・でも好きっていうか・・多分、大好きかな」

「そつか。ありがと、・・・で、どうする？もう少しソリソリする？」

「それとも、あの趣味の悪い奴のところに帰る？」

「ここに決まってるじゃん・・・、もう寝る」

「そつか、じゃあもう寝よつか」

「・・・手、繋いでいい？」

「え？」

「あ、瑞樹が嫌ならいいんだけど・・」

「僕は大歓迎だよ？正直言つて、香月を抱き枕みたいにして寝たい

し

「・・いいよ」

「え？」

「何回も言わせるな。・・・いいついでいいってんだろ」「・・素直になつたね。ずっと素直でいてよ？」

「うん・・・」

何も言わずに瑞樹は俺を抱き寄せる

「眠れそう?」

「……多分」

瑞樹の手は頭と背中に回っている。

「……背中はくすぐったいかも……」

「じめん、じやあやめる……」

「ううん。くすぐったくても……このままがいい。」

「そつか。……香月、顔上げて?」

「ん……?」

顔を上げると、今やきよりきつく抱きしめられた

そのせいで俺の顔は瑞樹の首筋の辺りにある。

「……何故か分らないけど、俺も瑞樹の背中に手を回した。」

「……香月、ちゃんとど」飯食てる……?」

「食べてるけど……?」

「へー、もつと食べたら?細いよ

「……瑞樹だつて細いじやん?」

「僕は普通だよ?」

「まあ、普通つて言われたら普通だと思つたび……。」

「……香月。僕、絶対香月のことが好きだから

「う、ん……ありがと」

俺の頭から手を離して俺の手の前に小指を出してきた

「……じゃあ約束ね

「?指……切り?」

「ひつかつた

疑問と同時に顔を上げると

と言われて、え?と思つている間にキスをされた。でも、触れるだけのキス

「何つて？約束のキスだけど？」

「何でそんな事つ！」

「・・・へえ、意識してくれてんだ?」

「意識してなんか・・つ

「だつて、顔真っ赤だよ？・・・あ、毛しかして風邪？大丈夫？」

「アーティストのアーティスト」

「業者が専用の二三の店をアリテ、その中にはヨーロッパの二三の店がある」

儀が番用のこと好きだ

と、真剣に言つてくれる。

「……え？ あれって、冗談じや……？」  
「……あの告白が冗談に聞こえたんだ？ 冗談なんかじやないよ？」  
そう言つと瑞樹は俺を抱きしめていた腕を放した。  
「おやすみ。」  
じてつもなく冷たく聞こえた声が脳の中に響く。  
瑞樹は、反対側のベッドへ行つた。

「…………どうせ俺は…………独りなんだよ、な…………」

そう呟いて気分を紛らわしたくなり部屋を出た。　・　・　・　瑞樹がついてきているとも知らずに。

「…………寒い。温室にでも行こうかな」

「運良く寮を抜け出せたので、いつものベンチへ向かう  
・・・上着持つてこればよかつた。」  
そう独り言を言ってベンチに寝転がる。

寝転がると、ベンチの冷たさが体に伝わってく  
る。

「…………冷たい。」

そう近くと上から何かをかけられた

「…………誰？」

暗くてよく見えないけど、田の前に誰かがいる。

それでも返事は返つてこない

…だから、誰？」

そういうて俺は上着をかぶつたまま起き上がる

レ  
しかね  
・  
・  
?

そいつは何も答えずに領いた。

「何で返事しないんだよ、

石川は俺に詫えかけるよ」「な、見て下さい。

卷之三

「…………」

卷之二

「アーティストの運営の仕事は、アーティストの運営の仕事」。

「ちょっと…どう行くんだよ…放せ…」

「うるさい、黙れ。」

そつぶたぐれられ、渋々ついていった。

そこでついで、俺の手を思いつきり引つ張つて行く。

「…………？部屋？」

ここは、俺たちの部屋だ。

返事もしないまま石川は俺をベッドに押し倒す。

「何・・・すんだよ・・・・・・・・?」

卷之二

石川は俺の手首を片手で抑えると

いきなりキスをしてきた。

何の抵抗もする気が無くなる。抵抗なんてする気分でもないし。

昔みたいに。どうせ、俺を利用するに決まっている。

最初は、友達。とか言つておいて、都合のいいときだけ友達じゃない、そんな事を言つんだ。

……こいつも、瑞樹も、どうせ皆一緒になんだ……。

そんな事を考えていると泣けてくる。

……つ。俺のこと利用して……何がつ、楽しい……んだ、よ……

……つ？

そういうと石川は目を見開いた。

「……利用つて何だよ？」

「……わかつてんだろ？ 分つてるくせに……そんな事言つなよ？」

「しない。……俺は利用なんかしない。ただ香月が好きなだけだ。

それの……何が悪いんだよ」

「どうせ、皆そういうんだろ？ 最初だけなんだよ……。そんなこ

といえるの。

俺は知つてゐるんだから……。

「何があつたんだよ。」「

「お前になんか言つたか。」「

「答える。」「

「嫌だ。……お前も、瑞樹もどうせ、皆一緒になんだろ？ お前達は俺の気持ちなんか分つてなんかくれない。」

「分つてやるつて言つたら？」

「ありえない。100パーセントありえない。人間なんてどうせ、

こんな生き物なんだよ？

一生かかつても分かり合えないんだよ。……分る？」

「分かり合える。」「

「分かり合えたりなんかしないんだよ……。」「

俺はそういうて押さえつけられている手首の力が弱まつたときその手を跳ね返して石川の顔に近づいて、そいつの顎をつかむ。

「人間なんて、一生かかっても分かり合えない。

それは決まってる、所詮そんなものなんだよ？

俺の気持ちなんて誰も知らない。

気づいてもくれない。女だって言葉もすっげえ嫌い。

もともと、お前の事なんかどうでもよかつたんだぜ？

はつきり言うと誰とも話したくなかったし

独りの方がよかつた。誰ともかかわりたくない。

人間という物自体とも絡みたくない。

強いて言うなら、家族とか親戚ならいいよ？

まあ本当のところ、家族とも絡みたくないんだよ。

そんな俺の気持ちなんて誰も知らないし、

分つてくれようともしないんだ。

お前なら分るよな？

本当のこと言うとこれが俺の本性なんだよ？・・・ハハッ。

自分でもおかしくて仕方が無いよ」

そう言って俺は、石川の隣を通り抜けて部屋を出た。  
部屋から出るとそこには瑞樹が立っていた

「・・・瑞樹、お前も聞こえてただろ？」

温室あたりから誰かもう1人いるって思つたら  
瑞樹だったんだ。まあ、俺はこういつ奴なんだ。  
だから、もう俺にかかわらないで？

・・・じゃ、そういうことだから、バイバイ！」

「・・・。」

瑞樹は悔しそうな顔をしている。

「まじよ。」

「・・・？ まだ何か用ですか？」

「・・・いい加減にしろよっ！」

「は？ 何言つて・・・」

「本当はこんな事嫌なんじゃないのかよ・・・？」

本当は嫌だ。でもこうするしかないんだ。

「嫌なんかじゃない。俺にかかるな。それも一生な  
はつきり言つけど、瑞樹。お前も俺にとつては  
邪魔な存在だったんだよ？ そんなことぐらう分つてよね

「・・・。」

また、悔しそうな顔をしている。

・・・これでいいんだ。言いたくない言葉だつたけど  
どうしても言わなきやならない衝動に駆られて  
あんなこと言つたけど・・・これで俺の事嫌いになつただろ・・・。  
それにも、いいすぎちゃつたかな。・・まあいいか・・。  
俺はこれ以上のこと、されてきたんだし。  
俺はそれ以上に苦しんでるんだ。

それぐらい分れ。瑞樹も、石川も・・・。

あれからとこいつものの、先生にどうしても、つて頼んでみると案外、1人部屋にしてくれた。  
俺にとつても都合がよかつたし  
あの2人にも・・・よかつたかも知れない。

なんだかんだ言つて、学校にも普通に通つている。  
石川とは、クラスが違うだけでも今はありがたい

ひどい事、言つたかな・・・。

そんなことを考えながら窓の外の空を見ていると誰かに声をかけられる

「香月くーん」

そいつは何かチャラい感じだった。

「・・・何?」

「話しあるんだけど、いい?」

「・・・だから、何?」

「ここに話しつくいんだけど」

「俺はここでもいいけど。」

はやくどこかに言つてくれ・・・話したくないんだよ

「でも・・・」

「何?俺はここがいいの。動きたくないし。」

俺なんて、皆から嫌われて当然の存在。

「はあ・・・じゃあさ。」

そいつって俺の手を引っ張る。

「ちょっと・・・」

「これならいい?」

そういうつて俺を抱きかかえる・・といつが

お姫様抱つこ？ 的なことをされ

る

「！？」

突然のこととに俺は啞然としていた

## 23話（前書き）

真人くん以外女っぽい名前について Worz

「何すんだよっ！降ろせっ！！！」  
「だつて、動きたくないんでしょう？」「  
そ、それはそうだけど・・・。」「  
そうときまれば、レッツ・ゴー」「  
はあっ！？」

そいつ（名前は知らない）が俺を抱っこして  
屋上へと続く道を進んでいく。

「どうちゅーべつ！」「

「到着じゃねえよ！何なんだよ、こんな所連れてきやがってっ！」「  
いやー、気になつた事あつたからさ。」

なんなんだ？こいつは。俺はこいつのこと知らない、なのに友達  
でも

無い俺に何のよつなんだ？

「・・・その前に、お前誰？」

そう、聞くと一瞬悲しそうな顔をしたよつな気がしたけど  
元の表情に戻つて・・・。

「俺？俺は神谷涼香。」  
「へー・・・、あ。俺は・・・」  
「知ってる。水原香月、16歳、誕生日は4月8日、身長は・・・も  
う160になつたかな？」

「な、んで誕生日まで知つてゐわけ？まず、身長は159センチ・・・  
・・本当に俺の事忘れたのか？」

「忘れたって……？俺、お前の事なんて知らないけど……」

「そうだよ、な……」

「は……？ 何て言つたんだよ……？」

「……なんでもない。」

そう、こいつて悲しそうに笑う。

「……」

その顔を見ていると、思に出したくない記憶のを

無理やり思い出すような、何故か頭が痛くなる……。

「……」

頭が痛い。意識が遠くなつていく。

またこの夢。

俺 でも小さい頃の俺。

独りだけの世界。

でも、少し前に誰かが居る。

小さい男の子。

俺は知っている。この子を

そう、すず。確かすずつて子。

「すず・・・・・・」

かつぎ?

「すずなの・・?」

「ふ。すずだよ、・・・それにはくの」とすずつて子のかつぎ

だけじやん

「そうだったね」

そうじつ余話をしている。

独りだつた世界が無くなる・・・筈だつた。

すずが遠くに行く。

「すず・・・どうのつ?」

「ごめん。ほく、いかなきや・・・。いつでもほくたむけとゆつ

だから。

やつは、すずが歩き出す

「まつて・・すず・・・」

追いつけない  
追いかけても、追いかけても。

ほんとうに、めんね・・。

そういうことは居なくなつた。

「…………」

俺は寝ていたのか・・・？その上はベッドだった。

# 何回風が空 このノタニ

「・・・夢か・・・・。」

「す、す、つていつたよな？」

ハセガワ・ジンイリ

「すずつて言つたか？」

え・・・。言つたのかは分らない。夢・だ・たから・・・・・・

「アーティザン」

「いいから教えろよ

わがたて

何に力が見えるか、見えてるか、見てるか、見てる。

… 何か、小さい男の子… すすんで言うんだけれど、その二か：

ノーベル

「俺から・・離れ、ていって・・・・・つ」

涙が溢れる。考えたくない。考えると辛くなる。

「か……もしかしてその……すす……奴す」と親友……

「え？ 何で、わかる・・

「そ・か・・・よ・か・た・お・前・の・中・に・俺・は・ま・た・し・た・ん・た・・・・・」

「え・・?」意味?

「まあ、香月が氣づくまで俺は待ってるから。」

そうこうして、どこかに行く。

この神谷涼香が”すず”と氣づくのはまだ先の話。

今日もかわらず学校生活を送っていたけど  
変わった事を言えば、あの神谷涼香がまたわざわざつけてくれるけどだ。

「香月。」

「あー、お前か。どうかいけ、邪魔だ」

「なんだよー、つめたいな。昔とは大違ひじやん」

「つめたくて結構。その前に昔つけて何。」

しまった、と困った顔をしてしまわす

「いや、何でもないって。本当のこと言つても香月が多分信じないと思つし……。」

「信じるつて言つたら?」

「でも、まだ言わないよ。香月が思い出すまで。」

「思い出すまでって……。俺が記憶なくなつたみたいじやないか。」

「まあ、そうなんだけど……。」

そういうて、また困った顔をする。

すずもあこつと似たような顔で笑つてたよな……。

「お前、すずと同じ笑いかたしてる。困つたとわ」

「そ、うなんだ……。」

すずつて言つたびに傷ついた顔をする君。

すずつて言葉が嫌いなのか?いや、でも傷ついた顔の中には  
少しだけ、嬉しいような雰囲気も混ざつてる。

でも、その”すずみたい”って言つ葉に本当に傷ついていたとは知らなかつた。

あの、氣を失つた日から一週間。

別に何も無かつたけど……。

今はやばい状態だ。

またベッドに押し倒されてる……といつか

押し倒されてると思う。

またつて言つても、今度は神谷涼香だけだ。

「……本当に俺の事、忘れたのか？」

真剣な目で聞いてくる

「だから……何で、俺お前の事知らないって言つてるじゃん！」

「……じゃあ、香月が言つすすつて奴がここに居た？」「

「居た？……そんなの会いに行くに決まってる。」

「すずが……すずから香月に会いに来たら？」

「嬉しいに決まってる……、てゆうか、なんですかにこだわるの！？お前に関係ないじゃ……」

「関係ある！」

怒鳴られる、怖い。こんなとき、すずが一緒だつたら。

「……俺たち、親友じやなかつたのかよ……？」「え……？」「

「俺だけ覚えてるつて……寂しいよな」

「……なんか、その……ごめん。」

お前がすずだとしても、もう関わりたくない。じゃ……？」

そつこつて横を通り抜ける

・・・俺つて何でこないい方しか出来ないんだろ。

「待てよ。」

そういうって俺の腕をつかむ。

「・・・なんだよ？」

俺は情けない顔で笑つて いると思つ。

「・・・お前、本当にそつ思つてゐるのか？ 関わりたくないつて思つて  
るのか？」

「え・・・」

「お前は・・・寂しいんぢゃないのか？」

「寂しくなんか無い・・・、俺は独りの方がいい。」

・・・ なんで素直になれないんだろう。本当は独りなんて嫌だ。な  
のにな・・・！」

「素直になれよ。」

そういうつて俺を抱き寄せる。

何で、こいつは・・・俺のことがわかるんだよ。心を読まれてるみ  
たいぢやないか。

「・・・何で。何で判るんだよ。・・・何で俺の気持ちがわかるんだ  
よ！」

「親友だから。俺と香月は親友なんだろ？」

「・・・そうだけど。」

「これだけは覚えておいて。俺と香月は・・・いつでも親友だから。」

僕から俺にかわつた”神谷涼香”

俺の事をいつでも親友つて言つてくれる”すず”

神谷涼香は・・・すずなんだ。

「すず・・・」

「・・・ん？」

「親友つて本当？ いつでも親友なの？」

「ああ、親友だよ  
「そつか・・・。  
」

多分、香月くんキャラ崩壊だw

神谷涼香＝すず

とわかつてからといつもの  
俺はすすにベツタリ。

とこ「うか、ひつつき虫みたいな感じ。

すずだけには正直になるつて決めたから。

何か変だけど、すずがいてくれたら友達とか要らないつて言つつか・  
・。

「香月。」

「何ー？」

「曇、屋上な

「オッケー」

屋上でお曇かあ・・・、寒くないかな。

まあ春だから調度いい気温かな

ボーッとしてたらいつの間にかお曇になつていた

「もー、曇か、早いなあ」

「香月、全然授業聞いてなかつただろ。」

「うつ・・何で・・・それを・・・」

「ちゃんと授業聞いてないとバカまつしぐらだぞー」

「バ・・・バカだと！？」

「なつ！・・・バカつてなんだよー」

「じゃ、屋上行くぞー。」

と言つて走り出した。

「待てよーつ！」

「すずーつ！」

「おー、ついてこれたか」

「何だよ、体力無いって言いたいのか？」

「うん」

「即答かよ」

「つべこべ言わずにー」

そういうとすすは俺を軽々と抱き上げた

「ちよつー何すんだよー皆見てるって・・！」

恥ずかしすぎて顔が真っ赤になつて手で顔を隠す

「顔真っ赤だぞー」

何楽しんでやがんだよつ・・・！

「へーんだつ。いやちまでもーいで

クソ・・・ツ！完全になめられてる・・・・・！

「言わなくてても行く！」

そういうくてすば走る

俺も走るしんどくならしい程度に

さうの間に抱かれて、ついに二つとも抱かれて、

「速いつて・・・つ！」

六二

۱۰۷

無いけど

ま、そんなんと云てもいいしやん、餓た、餓た、

總編輯 田中一郎  
編輯室編輯 田中一郎

すずの顔からそのまま視線をすらすと目に映つたものは・・・

瑞樹と石川・・・！

何である2人が・・・・一緒？

すると、瑞樹がコツチに気がついた・・・・？

俺は・・嫌な気持ちになる。

・・・す・・・・やつぱ屋上止めようよ。俺・・・・。

「どうしたんだよ？かつ・・・・・・」

「下の名前で呼ばないで。」

「え・・・・？」

「だから、下の名前で呼ばないで。」

「何で・・・・？」

「いいからっ！今は・・・・呼ばないで。」

そういって俺は身を翻して屋上の入り口の方へ走っていく。

「まてよ、香月」

・・・この声って、すずじやなくて・・・・瑞、樹。

「・・・・すず、教室帰ろう。」

しばらくの沈黙。俺がその沈黙を破るように入り口の方に歩き出す。

「まてつて言つてんじやん」

雰囲気を察知したのかすずは

「俺、邪魔みたいだから・・・・先帰るな。」

そういって屋上から出て行つた

先に口を開いたのは俺。

何だよ。

「へえー、随分と態度が違うんだねえ」

確かにそうだけど

お角には關係無し

圖書館

「僕、香月を守るつて言つたじやん。」

「守ってない。守れてない。結果俺が嫌な思いしかしてないんだよ・

それは比へたゞすすは俺の事分けてくれてんだよ 俺の事を

「ふ、只、五歳從母別、三歳二歳つ二段

重い空気が流れてて氣分が悪くなる

「・・・だからっ！俺はもともとお前達の事なんて友達とも思つてなかつたし！お、俺を・・俺の事を一番分つてるのはすずだけなんだよ！お前も分つたような口利くな！」

俺はこれ以上ここにいるとおかしくなりそうで屋上を飛び出した。  
屋上を出て、階段を下りて・・・・すぐ歩いた所にすずが立っていた  
「すずつ！・・俺もう嫌だよ・・・・・こんな所居たくない！」  
すずの胸に顔を埋めながら言つ。

「 しょ う が な い な あ ・ ・ ・ 。 目 、 瞳 れ。 」

・・何をするかは分らないけど・・・すずの言う事ない。

・・・すると。

「え！？何してんだよ！」

「大丈夫、目瞑つて。」

俺は・・・おんぶされてる？

まあいいか・・歩くの面倒くさいし

気がつくとすずが隣にいた。  
どうやら俺は寝ていたらしい。

「あ・・・すず、俺寝てた？」

「・・・・・・」

返答が無い。

「すずー、聞いてる？」

「・・・・・・」

何だよ無視とかひどいじやん。

「すーすー、聞ーいーてーるー？」

「・・・・・・」

「無視すんなよー。」

「・・・・・・」

なんだよこいつー

「・・・俺もまた寝るから起こせよ、すず。」

あれから何十分経つただろう・・・。

・・・寝れない。

寝れない、寝れない、寝れない、寝れない、寝れない！――！――！――！――！

寝ねえよ！・・・こうなつたら狸寝入りでも・・・つ！

総思つた時隣ですすが動いた。

やべえ・・・ばれないかな・・・。  
てか、なんばれないうつにする必要が・・・まあいいか。

「……あー、よく寝た。香月い？」  
「…………。」

見つからないよしおしなきゅ……。

「起きてんだろ、香月。」

「…………」

無視無視！寝ないと……でも寝れないつ！

「……ま、いつまで我慢できるか、だな。  
はあ……？ 何言つてんだよコイツ……！  
無視だ、無視！

いきなりすずが俺に抱きついてきて……！

（や、やめりよーつ！）  
くそつ！心中でしか呟べねー

するとすずの手が服の中に入つてきて

「ちゃんと飯食べらよ、香月。……お前も小さいなあ

すずの手が服から出て行つて、少し安心する。  
でも、今度は服の上から触つてくる

（……何だよこいつ！）

ふいに手の動きが止まる

（今度はなにをするんだよ……）

すると急に耳に息をかけられた！

（つー？……く、そ……こいつ俺の急所を狙いやがつて……！）

そうだ、俺は耳が弱い。それをすずは知つている。

(あ・・・こんなことわざるなり返事しておけばよかつた・・。)

すると急にすずは俺の耳に口を付けてきた。

לְהַלְלָה

「香月も頑張るな。……でも次はどうかなあ？」

俺は内心ビックリする

(・・・なんだよ、これ、すずかよ。)  
すずはフツと笑つてから耳に口を付けてから  
耳を低めてきた

「ひ、あつ・・・」

（あ・べ・く・じ・く）  
（あ・べ・く・じ・く）

「…」

「何？また・・・して欲しいわけ？」

( ۱۱ : ۱۱ )

〔二〕

「…別にいいじゃん。寝たかつたけど寝れなかつたし。つか、

お前何してくれてんだよ！俺の耳に……！／＼

すずはすこし黙つて

「……いや、耳弱いだろ？だから起きると思ってね。」

な人たる者

(二) かじりよ

35話（前書き）

会話文例一・・・（汗

「……でや、あの人たちって誰？」  
 「あー……あの人達？別にすずこは関係ないよ。」  
 （すずこに心配とかされたくないし……）  
 「いつおぐのが一番かな……。」

「……関係ない訳無いじゃん。」

「何で……」

「香月の事だし、何があつたんでしょう」  
 （なんだよ、すずは何でこいつ……俺の事分るんだよ……）

「…………」

「なんかあつたんだろ……？」

「まあ、色々とね」

絶対こじで言つたら氣まずくなりそうだし……

「俺には話せない事？」

（なんだよ……、言葉攻めかよ。）

俺が返答に困つていると

いきなり俺の耳に息を吹きかけてきた

「ちよつ！何す、なんだよ……つー」

「言つたか、言わないか？」

「へん……つ、言えば……いいんだろー。」

（ハハハ……やつてしまつたよ、クソッ…すきめ……。）

「でー？何があつたの」

「んー、まあ。元々はうん。まあね……うん。」

「うんだけじやわかんねーんだけどオ？」

「んー、いろいろ変な事に巻き込まれた、的な感じ?」「変な事つて?」

(・・・どこまで聞くんだよ)

「んーーー、俺は別にそんな気は無いけど、何かね俺の事好きだつて言い出すんだよ。あの一人」

「ふーん。で?香月はどう思つたわけ」

「・・・・別に。嘘だつて思つてたし。でも・・・・俺の気持ちも知らないで変な事してたし。」

「二人とも?」

「・・・・・・・・・。う、ん。あ、別にまじで変な事とかそういうのじゃないけど・・・」「じゃないけど?」

「何だよ・・・・・。言えばいいんだろ。はあ・・・・・・・・・・・・キスされました。2人に。これでいいですか!?」

(何でこんな事言わせるんだよ・・・、俺の身にもなれよ・・・!)

「ふーん…………で？それに対しても香月はどう思ったわけ？」

「どう思つたつて……」

（どう思つたつて聞かれても俺は別に好きな相手でもないし……嫌だつたけど……）

「……嫌とか、そいつが好きだつたから嬉しかつたとかあるじゃん？」

「う、嬉しくなんかないつて……！」

あ……俺は思わず叫んでしまつた。

嬉しくなんかなかつたし。

「ふーん……。」

俺は苛立ちを隠せなくなつて……

「なんだよつ……そつちから聞いてきたんだろ……ふーんで終わらせつもり！？」

「じゃあ、何すればいいんだよ？俺がお前にキスでもするか？」

「何でそつなるんだよ！？」

「お前がそれで終わらせるつもつもつからついたままでだ」

「つ……！」

俺が言つて出したことなのに、胸が苦しくなる。

喧嘩とかそつこうのやりたくなつたのに……でも俺が言つたか

ら……。

「……じめん。」

俺はそつこうでベッドから降りて、すずの部屋から出て行つた。

俺は何もすることがないで。

何をしようか考えると、一つだけ思いついた。

温室。瑞樹が教えてくれたけど何だかんだいって俺は気に入ってる。あそこはリラックスできるし、落ち着くにはもってこいの場所だ。俺は少しだけ敷地内を歩いてから温室に行つた。

そこには・・・・。

瑞樹が居た

あちらも俺の方に気がついたらしくて

一  
・  
・  
香月 じやん

「先輩……。すいません、邪魔しましたね。」  
そういうて俺は温室から出る。

・・・何だよ。俺が入った所に居るって・・・  
俺はまた敷地内を少し歩いてから  
俺も行つたことのない池に行つた。

俺は池の近くに腰を下ろす。

・・・「」はなんだか落ち着く、なんだろう。  
やつこやお医者さんに言われてたんだ・・。

『精神的な面でも、これまであつた事を考えると一人の時間などが  
あれば落ち着くと思います』

少しの間池のほうをボーっと見ていたら

後ろで“ガサ”と物音がした。

କାନ୍ତି ।

「やつと見つけた・・・香月。」

・・・見つけたつて、何で？俺にはわからない。

俺はすすと口喧嘩とかした事なんか一度も無かつたからどう対応すればいいのかとかわからなくなつてしまつて。

「・・・俺、もう行くから」

すすの隣を通り過ぎていく時また胸が苦しくなつていぐするとすすは俺の腕を引っ張る

「何だよ・・・。」

そういうて振り向く、すると

すすの顔は少し動いただけで俺とキスが出来るぐらいの距離にあって顔がどんどん赤くなつていく

「なつ・・・何！・・すんだよ・・」

語尾になるにつれて声が小さくなつていく。

「香月、顔赤い。」

（わかってる・・・、けどそれはすすが・・・。）

すすの視線につかまって動けなくなる。

すすはフツと笑つてから俺にキスをしてきた

抵抗したいのに体がいうことを利かなくて。

そして唇は離れた。

「・・・抵抗しないんだ？」

すすがそういうて、俺はまた顔がカツと赤くなる。

「つるさい・・・。」

そういうて俺はすすの横を通り過ぎて行つた。

途中で俺は走りだし、そのときにふと思つた

なんで抵抗しなかつたんだね？・・・しかも

しかも、すず相手に何であんなにドキドキするんだよ・・・！

最近なんか俺おかしいかな・・・。

すずにキスされていたところを誰かが見ていたなんて思つてもいいな  
かつた。

## 3.9 振幅（強度）

番円ぐんとすずかって回る輪廻の設定にしたよいな仮もある土産……  
よし、仮にしないでおけ……  
(ここ加減で「めんなんやこ……」)

その次の日俺は熱を出した。

俺は今、すずの部屋に寝泊りしていて  
俺の部屋は使ってないし、もうすずの部屋に行くのが当たり前にな  
つてきている。

すずの部屋にいるけど、昨日あんなこと（キス）をされてから  
頭がボーッとして、すずが何を聞いてきても返事はほぼ曖昧だった。  
するとすずがこんな事を言つてきた

「香月が休むなら俺も休む。」

・・・はあー? こいつ、すずは何を考えてんだ! ? ? ? ?  
俺が休むからすずも休む? ふざけてるんじゃないよ!

しかも昨日あんなことされたし、なんかまたされたらどうすればいい  
かわからんねーじやん!

・・・・・あ、今思つたけど俺、熱出してるじやん!

フツフツフ・・・、俺ナイス!

熱でてるしキスなんてされねーよなつ!

ハツハツハツハ、ざまあ見ろすず!!

俺がそんな事を考えていて顔が笑っていたのか

「何かおかしいことでもあつたか?」

そんな事を聞かれて、つい口が滑すべつてしまつた。

「アハハ、だつて、俺熱出てるし昨日みたいにすずが俺にキスなん  
てできねーじやんつ!」

数秒たつて気づいた

「あ・・・・・・・・・、ゴホツ、ゴホツ。い、今のは・・・・・  
すずの瞳まなこが獲物を捕らえたかのように奥で光つている。  
・・・・・やつてしまつた。何で俺つてこんなにおつちよこちよいな

んだよっ！！

「俺にキスされるって思つてた・・・・わけ？」

「う・・・・・・。」

いや、その前に、『わけ？』って何？？

昨日したじやん！俺に！！

するとすぐ

「ふーん、して欲しかったんだ？」

俺は慌てて返事をする

「なつ！俺はそんな事言つて・・・・つ――ゴホッゴホッ・・・・。

あ” - - - のび<sup>いて</sup>痛え - - - 。ゴホッゴホッ「

俺、大丈夫かな。体弱いのに・・・・。

「ハア。」

俺はため息をつくと「もう俺疲れたから寝る。」と言だけ言つて  
俺は眠りに落ちていつた。

39話（後書き）

テスト2日前^p^

課題が終わってないようw

一つも終わってねえ、期末なのに！！w

やづあいwビうじょうwwww

w

俺は目が覚めてから「気分転換に外に出たい」とすずに言つてから部屋を出た。

今は学校（授業）がある時間だし、温室内には誰もいないだろうと思つていた俺がバカだつた。

あの時外に出ていなかつたらあんなことにはならなかつたと言つに。

少し歩いて温室に向かつた、運良く誰も居なかつたので（というより、学校（授業）がある時間だし、いなくて当然なのだ

俺は温室にあるベンチに寝転がっていた。

た。

卷之六

その声には聞き覚えがあつて。俺が今一番会いたくない奴だったのかもしれない。

思つ。 顔を見るのが怖がつた でも 逃げ出してちやダメなんだ ・・ と

「・・・はい。何ですか・・・俺に何か用でもありました?」  
俺は平然を装つて返事をする、でも、かすかに声が震えている。  
本当は脳内が「チャゴチャになつていなくてなんて言葉を返せばいいの  
かも分らない。

・・俺が今、唯一堅固で話してると言えば一人しかいない。

瑞樹・・・。

「・・・まだ敬語で話す・・・か。」

「先輩ですし・・・・当たり前だと思いますよ。」

「この前まではタメ口だったのに?」

「つ・・・・・、それより何で先輩がここにいるんですか。」

「そう、まずはそれが疑問だった。話を無理やりそらしたけど・・・・。」

「ふーん、話をそらすなんて、いい根性してるよね。まあいいけど。」

僕がここにいるのは・・・・

僕のため・・・・って言った方がいいのかな?」

・・・瑞樹のため?何かここに来て得があるのだろうか?

## 4-1話（前書き）

テスト終わりましたー  
もう開放されましたよ　あの紙つぺらから　www  
うれしい　www

今おもいましたが香月くんは天然なのでしょうか?  
考えている事がすっごくかわいいような、幼稚なような・・・。

・・もしかして瑞樹は温室に植物を見に来た・・・のかな。  
 「・・・じゃあ俺、邪魔ですね、温室に植物を見にきたんでしょう？」

いつも瑞樹は温室に居るのだが、そう思つのは俺だけだろうか。

そう一言言つて俺は瑞樹の隣を通り過ぎる

「待てよ香月。」

「・・・何ですか。俺にまだ用でもありますか？」「隠れてないで出てきたらどうだ？お一人さん二人？今ここに居るのは俺と瑞樹だけじゃ・・・。

すると周りからガサツと音がしてそちらのほうに振り向くと  
 すすと石川が居た。

（すす！？何でお前がここに・・・。）

「チツ、見つかったか。瑞樹ってなんでそこまで勘が鋭いんだよ。  
 ・・はあ？瑞樹？石川が瑞樹の事を瑞樹ってよんでもる！？  
 え・・・？何で？何で何で何で・・・！？？

「・・・真人、お前・・・。あー、もういい・・・はあ・・・。  
 面倒くせーな。」

・・何がなんだかわからない。

俺が口を開いたまま閉じてなかつたらしく俺に気づいた瑞樹が「う  
 言つてきた。

「あ、僕たち兄弟だから」「・・・・・・はい？」「いや、だから、兄弟だって、僕と真人は。」

・・・ん？・・兄弟・・・

「うん。兄弟」

「はああああああ！？兄弟？・・・え、でもさ、石川と瑞樹名字違  
うじゃん・・・。」

卷之三

義理の兄弟で詠ふはいはがが

はるかに、  
せうすに、  
何がわが心なしよ。

俺はバカとため息をつく  
すずが話の内容に入つて

いいかな  
・・つて。

そのまま俺はすすの部屋まで連れて行かれた。

續編卷之二十一

すずが何も言わないので俺はいつたんすずから離れようとした。

すなへすは俺を壁まで追い詰めて押さえつけ

ハア…なんでだる、こいつと仲良くなつてからこいつのか

どこか悪いとか・・・、いや。違うか。

俺は無言のまま俯いてすずの顔を見ないようにする。

アリナリトトコトト語りた中ノ木ガ木ガ木ガ

「……す、す、もしかして今さっきの事で怒ってる？話に入れなか

「たとか・・さ？」

道文

いあんが

「アーニー、アーニーの野球の話題」

は「何だ。急にどう思つて普通は”方達として”女

「 . . . 」 友達として ”ねえ . . . 。 ”

「 . . . 何？」

「 . . . いや、なんでもない」

そういうつて俺から離れていく。

・・なんだよ、機嫌直るの早いのか？

・・・いや、違うか・・・。

でも何せ、あんなに口口口表情とか変えてさ。

すずにちょっと不満を持ったけどあえてそこは気にしなかった。

## 42話（前書き）

更新ストップしてしませんでしたへへ；  
いろいろと時間が無くてかけないのでですが  
これからちよつとずつちよつとずつ書いていりたいと思います  
よろしくお願いします。rzn

今は夜。

あれから何時間たつたか分らないけど  
すずとはまだ話していない。

「・・・・・」

声をかけたくても勇気が無くて・・・・・。  
俺つてきっと弱虫に違いない。

きっと弱虫なんだ・・・・。

・・今は関係ないか。

声・・かけてみよつかな・・・・。

「・・・・・すず」

「・・・・・香月」

2人の声が同時になつて俺はあたふたしてしまつ。

「・・すず、先言えよ。俺はいいからさつ・・・・！」

「いや・・お前言えよ。」

「すずが・・・・」

「香月が・・・・」

「・・じやあ、じゃんけんで決めよー！負けた方が先に言つー。」

「わかった」

「「じゃんけん、ほんッ！」

「う・・・・・」

負けた、言いだしつべの俺が負けた・・・。くそおおお。

「言いだしつべのくせに負けたな。」

「

「・・・言えばいいんだろ?言えば。」

・・・いいばいといつていいてるから。

なんていつたらいいだろ・・・気分で?

「…………なんで俺すずの事呼んだんだろうな。気分…………  
・ とか？」

負けても一緒にたたな。

卷之三

「……同上、即「御用」ロホリニシテ也。」

・・・・?なんか俺変な事言つたような・・言つてないよつな。  
深く考へないでおこひ、多分変な事言つてたらすずがつつかかつて  
くるもんな。

## 42話（後書き）

次回に続く  
。

## 43話（前書き）

更新stopして本当にスイマセン・・・。  
はつきり言つとこの小説の更新のことがすっかり頭から抜けていました・・・。  
塾にも入つたので更新率下がると思うんですが  
どうか許してやってください・・・。」  
お気に入りに登録してくれている方や見ててくれている方、申し訳あ  
りません；

そんな事を思つてすずの方を見ると  
すずの顔が赤くなつていて見ている自分がびっくりした。

「すゞめいたんだよ・・・・?」

・・・お前のせいだ

俺のせい？？

「」あひ

あいやそんじに意図しなくて、ああ落ちた

卷之三

「同上」、柳川の「か」

「一九一九年一月二十九日午前九時半

「じゃあ、教えてくれてもいいじゃんー

「・・・じゃあ、キスしてくれたら教えてもいいかな」

「怎？」

# 男の俺が？男に？キス？

なに考えてんだ? しかも何で俺が・・・?

— するか、しないかどっち?」

そんなんの…俺は男たそ?何ですすにギアなんかしなきやなん

なしのさ！」

「お前がたまに

可ハ兎は二ル从ニ開ハ結ニシテ

卷之三

なんて思つたりしたからすすの部屋を出て行つた。

やつぱりいつもの温室。

瑞樹が教えてくれた場所・・・。ひとつひととせきにしてないけど結構お気に入りなのだ。

春といつこともあって、気温が調度よくなつとつとしてこる。つまんない

俺の意識は糸が切れるように遠のいていった

43話（後書き）

遅すぎるナビ最近夏田にこまつてきたw

#### 44話（前書き）

今度は「」で小説始めよつかと思つておつます。・・・。  
そして、小野の熱烈 answer にハマつてこむところの真実

田 覚めたとき俺は暗い部屋に居た。

「いや、どうだつて辺つを見回してみる

（「は・・・・・寮の部屋みたいだけですすの部屋では無からうだしな・・・・・）

どこからか知らないが”ガタ”と音がした。

「・・・・・誰？」

返事を待つてみるが返答はない

ふいに”ニヤー”といつ声が聞こえて猫だということが分かる。俺はベッドから降りて猫のそばに行く。

俺は猫を抱いて頭をなでてみると

気持ちよかつたのか喉をゴロゴロと鳴らしている  
それがかわいいので勝手にタマ（仮）と名づけた。

しばらく頭をなでてやつてみると

急に俺の腕から飛び出していくので猫を追いかけてみると

「おーい、どここるんだよ、タマ（仮）

（次回に続く）

すると向ひの方から足音が聞こえてきた。

俺はひとりで身を隠したが、俺の脚が見えていたのだらうか。

「誰？」

・・・ひちが聞きたこよ。とも思つてしまつが

もしかするとこの声つて・・・・・。

「ねえ、誰？」

瑞樹だ。

寝ている演技ふりでもしておひ

俺は頭を体育座りをしたひざの上において寝たふりをする。

気づかれない事を祈つておひ。

そんな事を思つているところの間にか寝ていたのか、俺は

田を覚ますとまたベッドの上にいた。

「んー・・・・・。?」

辺りを見回してみる。

「起きたのか。」

瑞樹の声が俺の真後ろで聞こえる。

「・・・・・夢、か。」

そう言つて俺は布団をかぶつた

「あらじやなこよ。」

なんだか機嫌（きへん）が悪そうに言つてきた

「何で機嫌悪いのさ」

つて・・・そんな事言つてゐる場合ぢやないよなあ・・・。

瑞樹だし・・・悪い事だつていろいろしたし・・・・・謝つた方が

ししのかな

お前か

「えー、うーん、業二キマシハ、此一は井せば。

そういうつて瑞樹は自分の唇に人差し指をあてる。

「キ・・スつて・・・なんで。」

「……………また嫌な

んだよ・・・・・僕にも俺達男なんだし・・・・・

いや、待てよ?俺って・・・すずの事すきなんだよね。多分、男同

「典説」

## 「祖谷ぐれなみ言し語」

当たられるのが左

「でられるのが怖がつたし、認めたくなかった

好きなんでしょう？」

「何が…・・・・？」

「神谷くんの事」

「何で？」

「すきなんでしょう？認めたら？」

「好きじゃ・・・・・・」

「好きなんでしょ？見ててこっちが嫌になつてくるんだよねー、早く認めてくれないと俺達が疲れるんだから。」

「何で？・・・俺のせいだ。」

「俺のせいだ皆が・・・・・・・・・・。」

「い、めんなさい・・・・。」

頭の中で俺であって、でも俺じゃない「誰か」が頭の中で意見を言いつぶつている。

嫌だ、やめてよ。

何で俺が攻められなきゃいけないの？

俺のせいなのか？俺が悪いのか？

何で？

俺は何したんだよ？

俺が悪いんだ？

やめろよ。そんな事言われたらまた俺はみんなの前からいなくなきゃいけないのか？

頭が痛い。

俺は何をしたんだろうか

俺は・・・。

そこで俺の意識はなくなっていたらしい。

目が覚めると白い天井。  
ドコなのか分らない。

そんな事を考へていると向いの方からドアがあく音がした

## 48話（前書き）

「めんなさい、1ヶ月ぶりの更新です。

今日は熱があつて学校休んでます。

2回ぐらい更新できたら嬉しいと思つてます

俺の方に近づいてくるのは  
瑞樹だ。

俺は知らないひむか田をやじっていた。

「昨日の質問、忘れたわけないよね？僕は早く答えて欲しいんだけど

・・・まだ。何で俺を攻めるんだよ・・・・・。

・・・・・やめて

「何？」

「やめて・・・・・なんで？何で俺が・・・・・やめて

「は？何のこじと黙ってんの？」

・何で。何で？何で俺が攻められなきゃ・・・・・じめられなきゃいけないの？

・答え、俺の存在がジャマだから。

・皆俺のことが嫌い？

・答え、嫌い・・・。

そうだ、俺が消えればいいんだ、ここから。  
そうだよ、違う所にいけばいいんだよ。  
そうだ、それが一番いい。  
どこに行こうか。どこがいい?  
俺はどこでもいい、でもできるだけ遠い所に。  
そうだね、ソレが一番いいや。

## 49話（前編）

えー、47・48話の内容を思いつきつ変えましたので  
47から見ていただくといいと思います

俺は夜になつてから保健室を出て自分の部屋・・・寮の部屋に着いた。荷物をまとめる。

後は朝になつて退学届けを出せばそれで終わり

「だつたはずなのに。」

「何でだよ、何でお前がここにいるんだよ。」  
「何で・・・。」

「今から何しようとしてた?」

俺は目をそらす。

何でこいつが俺の部屋に。  
こいつにも迷惑はかけたくなかつた。  
だから、気づかれずにここから離れようとしたのに・・・  
どうしてお前が・・・すすがココにいるんだよ。」

「何で?」

「それはコッソリのセリフなんだけど」

「どうしてよ・・・俺行かなくちゃ行けない。ここにいたら・・・」

「どこに行くんだよ。」

「そんなの聞いたつて別に得なんかないじゃん。」

「教える」

「・・・そんなの決まってない。どこかにいくよ。口からすぐ離れた所に。だからといって・・・『皆』で出した意見なんだか

「うら

そう、これは『皆』で出した意見。

俺と『皆』が出した意見。

俺の経験から。

だつて皆俺がいなくなるつて分つたら喜んでたから。

先生も。

・・・懐かしいな。

そうだ、先生もグルだつたんだ・・・

でもそんなのは昔の話。

親が俺のこと心配して引っ越したけど。

でも今回は自分で決めた。

誰の力も借りずに・・・

『皆』<sup>ひとり</sup>で・・・

書いていた文章が2回も消えないとつナシとつ消しあり。  
でも俺はめげずに頑張るー！

「『呪つてだれだよ』

「『『呪つて』……？それは言えない。だつて……』

俺、だから。

『呪つて』……？ 俺は俺であつて

俺つていうのが『呪つて』

こういふのは多重人格というのだろうか。

でも、すすには知られたくない……。

すずだからこそ、知られたくない……。

「だつて、何？……もしかして、お前また呪みみたいに……」

俺はすすが言い終わる前に言つてやつた

「は？ そんなわけねえだろ？ 何勘違いしてんの！？ 仮にももう高校生なんだぜ？ そんなことする奴いるのかよ……」

でも、と俺は続ける。

「お前のそういう所、鬱陶しい。止めてくれない？」

その一言ですすがすくへ傷ついた顔をした。

「……なんだよ、その顔、やめるよ。俺が悪いみたいじやん」

実際俺が悪いけど……、でも「うつでもしなきやすすは聞いてくれないだろ？ と想つての判断だ。

「香月、お前それ本氣で言つてんの……？」

今さっきの傷ついた顔のまままずは俺に聞いてきた。

## 5-1話（前書き）

番円くんがやせぐれてるといつか・・・。

ああああああああ  
内容がわからなくなつてきま

どういふつにかけばいいかわからなくなつてました。  
変な内容だけど読んでくれたらうれしいです。○ー

「本気だよ？俺、お前に嘘言つたことあつたっけ？」

「すずには嘘をついたことが無い。」

「これが初めてだ。」

「今のお前は嘘、ついてる」

「何で、何で分るんだよ」

「そんなのじうじつたらわかるんだよ」

「お前が嘘つくときは・・・。」

「何だよ、俺が嘘つくって何でわかるんだよー。」

「それは・・・。」

「何？俺には言えないわけ？」

「俺は嘘つくとき何かしてたか？」

「何？何をしてんだよ・・・？」

「お前、泣いてるから」

「一瞬どうこう意味が分らなかつた。」

「だけど、よく顔を触つてみると確かに自分の涙で濡れていた

「・・・つーつむせー！俺は・・・俺はすずの事なんか・・・。」

「・・・。」

次の言葉が出なくなつた。

俺はずのことをどう思つてゐるんだ?

好き?嫌い?

……どうなんだよ。

「なあ、香月。」

「……なんだよ」

「俺の事、好きなのか嫌いなのか……はつ考つしてくれよ」

「俺はずの事なんか、好きじゃ……つ!」

ない?

それとも好き?

俺はずの事本当にどう思つてゐるんだ?

## 52話（前書き）

すずがまさかの告白ー…？ですwww

パンダヒーローをこいえ部で熱唱して、失敗しまくったために  
喉が痛いです。orz

「まあ、もう少しあいでもいいだろー?」

すすか怒ったの  
初めて見た  
何で、

「… 俺の事、ばっかり…………何で、そんな事、言うんだよ…」

何で、俺はこうもマイナス思考なのだろうか。  
おかげで頭が痛くなつてきた。

「おい、かつ・・・・・・・・

「やたよ 何でみんな 僕の事なんか気にしないだよ  
僕なんかどう

だんだん悲しくなつてきたり

自分でもこいつは嫌だと思っているけど

性格つてやつぱり、すぐに直せるものじゃないし。

そもそも、皆俺の事友達みたいに扱うからいけないんだよ。

瑞樹も、石川も、すすも、皆のせいだ。  
俺は悪くない。俺に構うから俺がこんな思いをしないといけないんだよ。・。

「泣いてても分らないんだけど。香月・・・俺に話せ、何があつたか。」

「やだ、言いたくない。何も、何も言いたくない。」しないでっ！

香月

こないで、つて言ったのにまだ、近づいてくる

「いいでいいでんじません!」

それでもまだ近づいてくる

ぐんなって言いたいんだ!!?俺に構いな!!。。。ここから出て

「兼  
ざ」

「じゃあ、俺が出て行く！・・・そこで二て！」

「ジナ」

「何で」

お前には関係ない！」

13

「俺がお前の事

最後の一撃に俺の思考は一瞬止まつた。

「・・・何言つてんの？お前が・・俺を好き・・・・？」

- そ う た

「團」

「じゃあ、なんなんだよ・・・」

「友達なんかじゃない。  
俺はお前の事ずっと好きだった。守ってや  
りたかつたんだ」

「守るって何だよ・・・。俺は子供じゃない、心配される必要なんかない・・・！」

そうだ、守られる必要なんかない

何か、香月の性格と俺の性格が似てるよつなかがしてきた・・・。  
俺、マイナス思考だし。たゞ、香月とおんなじ」ととかおもつたこと  
あるし え w

ぬぬぬー、自分の性格とめりあっているー。かぶせたのだらつか・・・。

## 53話（前書き）

皆さん、お久しぶりの更新で「やりますよ」  
楽しみに待っていてくれた方（いるのか？）、待たせてしまつて申  
し訳ないです・・。○rn

PS 小説の文章の書き方とかかわりまくつててすいません。○rn  
オトンにちょくちょく見られるから怖いわあ www  
ではではー、始まり始まりー。

そうだ、俺は子供なんかじゃないんだ……！

「馬鹿にすんじゃねえよ……、お前は俺の気持ちなんて分かるはずが無いだ……。」

「俺には……分かる」

「……つ、何でなんだよ！どうせ人間なんて他人の心が分かることなんて一生ないんだよ！」

人間なんて所詮、人の本心なんで分かるはずがないんだ  
分かられてたまるか……！

俺は万が一の時に備えていつも胸ポケットに折りたたみナイフとか  
危ないものがチャツカリと入ってる。

それを胸ポケットから俺は出した。

## 53話（後書き）

折りたたみナイフ w 高校生がこんなもん持つていいのか・・・？  
まあ、昔いろいろされてたしその恐怖心もまだのこつてるわけで・・・。

つてカンヅ w w w

おぬさんがつるんで今日は落ちます・・・ノシ

## 54話（前書き）

またまたお久しぶりです。更新してなくて「ごめんなさい」です  
と、いうより折りたたみナイフってD R R R のイザヤちっくですよ  
ねー・・・w  
ネタが思いつきません、投げやりで「ごめんなさい」。  
文章力なくて「ごめんなさい」です。o r n  
がんばります

「香月……何だよ、それ。」

「見て分からない？」

すずはすごく驚いた顔をしている、当たり前……か。親友だとおもつてた人にこんな事されるんだもんなあ。

「すず……悔しい？」

「……」

すずは何も言わずに俯く。

「……悲しいの？ 苦しいの？」

声が震える、別に怖いわけじゃない。笑えてくる。

今まで俺が味わってきた気持ちを思い知つたら良いんだ。悲しい？ 苦しい？ だつたらもつともがけばいい。苦しめばいいんだ。

「……うるさいこいつ、お前は自分が苦しいとでも思つてるのか！」

「つ……、何だよ、何も知らないくせに……知つたふうに言つんじやねえよ……」

「知らなくなんかねえよー俺がどんだけ苦しい思いしてきたのか……」

「……」

すずが俺の胸倉を掴んで訴えてくる。

「お前はいつも自分が傷ついてたとでも思つてんのか？」

「思つてるさ！ お前は俺の中学の頃を知つてない！ 俺がどんな目にあつてたのかも！」

お前は知つてるはずねえんだよ……！

54話（後書き）

ノッカーウ

うたプリネタすいません

ああああああ

香月くんノッカーウ　ｗｗｗ

次もこの調子で書きます。

ネタを忘れないうちにｗｗｗ

「・・・つてゐる」

—  
•  
•  
•  
何  
?

知つてゐて言つてんが、おお、おお、

アーヴィング、俺とあんな醜い世界で……。

一緒にばつが無い。そんなのありえない

すすたつたゞ俺の事助にてぐれるせん・・・

助けてくれて・・・・・

11

「思い出した・・・？」

した。  
・  
・  
・  
すすに  
・  
・  
・  
した。

卷之三

名前も知つてた、何で？

じゃあ、なんで俺と一緒に学年に入るんだよ？おかしいだろ？

二二九

「可で？可で？知つてゐぬ？」「……」

•  
•  
•  
•

すずはすゞ悲しき顔をしてゐる。

こんな顔させたいわけじゃなかつたのに・・・。

これ以上俺を傷つけないで、このままのその彫刻一番傷つくから

『 』 『 』 『 』 『 』

— 一 めん

「やめろひでいつてんじやん……」

やめろ、やめろ、やめろッ！！

俺はどうしたらいい？？？何も知らない。

すずはいつもどうやって俺を慰めてくれた？

・・・思い出せない。

何で？何で思い出せないんだよ。

「何で……いやだよ。やめて……嫌だ……」

「お前……なんで泣いて……」

すずが苦しそうな顔をする

「やめて！泣いてなんか……嫌だ、やめてよ！」

自分で何を言つてるとか分からない  
いろいろな感情がいっぱい出てきて

何を言えばいいか、わからない

「やめてよ……その顔やめて？？？痛い、やめて……」

すずは……俺の手を握つてくれてた。

いつも俺が悲しい時は。

いつも、いつも……数え切れないほど。

俺は……泣きながらすずの手を握つた

「・・・・・つ！」

すずはまた苦しそうな顔をした。

何で・・何で笑ってくれないの？

「・・・・・香月。それ、やめて」

その言葉はとても冷たい拒絕の言葉

「・・・何で？何で笑ってくれないの？何で・・・」

手を離した

すると少し安心したような表情をしたけど、すぐにまた苦しそうな

顔をする。

「じめんな、香月・・・。」

「つ！」

首筋に鈍い痛みがくる。意識が遠のいていく

「・・・じの気持ちを伝えたら俺は・・・・・・・・

「すず・・・つ！」

目が覚めたときには、いた場所は、無。

# 何もない、真っ白な世界。

“ 悅し ” 何もないのか悦し

それは、  
”俺” だった。昔の何の光もない俺。

苦しいんでしょ？…たゞたゞ何も考へなくていいんだよ。

セ、向も考へていい。昔の俺のたのひ。

＜戻る？＞

そう、戻ればいいんだよ

今までの事を忘れた」しんた

忘れる  
・  
・  
・  
?

何で、忘れたくない

「何で？」

＜・・・わからぬい＞

すすの事 また気にしてゐる

すずは”俺”を裏切った『守る』って言つたのに守つてくれなかつたよ?

<・・・・・>

すずは俺が苦しいことを分かつてたのに見捨てたんだよ。

よく、分からぬ。考へることより言葉が出てくるから

俺は何を言つてのかもあまり分からぬ。

中学の時だつて、俺がいるつていうのを分かつていていたのに助けになんて来てくれなかつた。そうでしょ?

<でも・・・・・>

好きだから

<え・・・・・>

すずが、好きだから?だから許しちゃうの?

<好き・・・・?俺が?すずのことを?>

違うよな、俺はすずを好きじゃない。裏切つた奴を俺アキラは好きになれる?

<なれ・・・・・>

迷つてるの?・・・・・あ、そろそろ時間が来ちゃつたみたい。また今度話をしよう?そのときに忘れないか・・・忘れたくないか、教えてくれると嬉しいな?

<俺、は・・・・>

何かよく分からぬ  
WWW

文章下手ひじめんなせー

意喩不明なり語はなべてきたよべた笑かしむ

文章の書き方とかめりぢや ハロハロ變つてますよね · · · · ·  
「めんなさい。

暖かい何かに包まれている。

目を覚ますとそこはどひやら保健室のようだった。  
今さつきのは・・・・夢のようだ。

それにもしても、何で昔の俺が出てきたんだろう。  
それに、俺はすずが好き・・・だつたのか?  
いや、そんな事はありえない。

好きなわけ・・・・・。

”ガラツ”と保健室の入り口が開いた。

カーテンがあるので誰が来たのかもわからない。

・・・分かるのは俺が寝ているベッドに近づいてくる、という  
事だけだ。

カーテンが開く。

「・・・・・・・・・すず」

そこに立っていたのはすずだつた。

「・・・香月、少しば落ち着いた?」

「落ち着いた・・・・?」

逆に戸惑っている。夢で俺に会つたから。

「それより・・・、何であんな事したんだよ・・・・

首筋をさする、少しまだ痛い。

「まあ、落ち着いてほしかつたのもあるけど・・・まずナイフ、危  
ないでしょ? あんなので切られたら俺だつてシャレにならないし・・  
?」

ハツと俺は気づいて自分の胸ポケットに手を伸ばす。  
無い。

「残念、ここにあります」

そうやつてすずはナイフを俺に見せる。

「つ・・・！返せーー！」

「おっと……、返してたまるか」

「何でだよ！ つ・・・返せーー！」

ナイフに手を伸ばす。するとベツ

バランスを崩して床に落ちそうになる。

怖い、  
と思って目を瞑つたけれど、  
痛みは無い。

！」

すずが好き。

急にその単語が浮かんだ、その瞬間に顔が赤くなつていいくのが分かつた。

すすか備をヘッドに戻す

「何を熱でもあんの?」  
すずが俺の頬おほだ一弾を当てる

さつきより、どんどん顔が赤くなつていいく。

卷之三

「元  
・  
・  
?」

卷二

急に石川にされた事を思い出した

卷之三

「その顔、やめてよ・・・」

すすのそんな顔を見るのは嫌だ  
俺はすすのそんな顔を見たいわ！」

・・・無邪気に笑つてゐる顔が見たいんだ。

そんな事を思つてゐるうちにまた涙があふれてくる。

「い、やだつ・・・そん、な顔見たくな、い・・・つ」

「何で?・・・俺の事、嫌いだから?」

「嫌い!」

その言葉が俺の心にグッと刺さる。

「俺、は・・・・・・つ」

「・・・・・まあ、いいよ。」

そういうなりすずは俺の上から退いた。

そうしてすずは部屋から出て行つた。  
俺はすずの見せた顔がだた忘れられて、一人でずっと泣いていた。

いつたん落ち着いたので  
自分の部屋に戻る。

さつきからすずの顔しか思い浮かばない。

・・・この痛さが何か分らない。

でも、感じた事の無い痛み、心が重くなつて気持ちも沈む。  
この気持ちはいつたい何なんだろう・・・。

気づくとまたあの何も無い世界に俺は一人で立つていた。  
俺は待つていた、もちろん俺<sup>あいつ</sup>を。

・・・なのに来ない。その代わりにすずが出てきた。

何で、何ですすがここにいるのかわからない。

《・・・・・香月は俺の事好き?・・・俺は好きだよ、お前の事》  
頭が真っ白になる。

嘘だ、嘘に決まってる。騙されるな、これは俺の夢だ。  
すずが居るわけ・・・・!

なあ、香月

<！？>

頭の真後ろから声が聞こえてくる。  
びっくりして振り返ると

すずが居た。

動かないで聞いて

<な、何だよ・・・>

耳元に息がかかつてくすぐつたい

<は、早く言えよ・・・>

ふつと笑つて俺の前に来る

当然俺は顔が真つ赤になつてゐる。

”俺は香月の事、大好きだよ”

吐息混じりに言つていたから

色っぽくて、でもかつこよくて。

耳が蕩けそうになつて、もう自分がどうなつてゐるか分からなくて。

思考も止まる。

今、この空間が止まつてゐるような感覚に陥つた。

## 6-1話（前書き）

もうすぐすゞ編は完結するかも知れぬで、クリスマスネタとか書く  
かもしれません。  
あ、多分R-18です え

香月はどうなんだよ？

「どう、って……」

返事、聞かせろよ。待ってるから……

そういうつてすずは消えていった

ずっと、遠くの方に。

追いかけてもたどり着けなくて。

それが怖くなつて。

”俺がいるからこうなつたのか？？”

”俺がいなかつたらすすもこんな思いしなくて済んだのに”

なんて思つてしまつ自分が怖くて

。

目が覚めるとすぐに

嫌な汗をかいていたことがわかつた。

”すずは今どこに居る……？”

怖い。もし居なくなつたとしたら？  
やめて欲しい、行かないで欲しい。

俺を置いて行かないで。

気が付くと俺すずの部屋の前に居た。  
無意識にすずの部屋の前まで来ていたらしい。

俺はこの扉を開ける資格があるのか。

・無い。

俺は自分からすずを突き放したんだ。  
それなのにいまさら……。

「香、月……？」

頭の上から聞きなれた声が聞こえてきた。

「つ……」

「……何。」

とても冷たい声。

俺は怖くなつた。

「ごめん、すず……俺……」

「何？」

「俺……は、すず……『ごめん』

「何で？」

「何でつて……この前もあんなことしたし……それに？」

怖い、この言葉を言つていいのか。  
言つたらきっと俺は後悔するだろ。ひ。  
もづ、すずと会つ勇氣も無くなる。

・・・でも。

「俺は……すずの事好き……だから」

「つ……」

一瞬驚いた顔をしたすずだけ

またもとの表情に戻つて聞いてきた。

「……それ、本気？」

「……うん。」

「どういう意味で」

「どういう……つて」

どういう意味？分からぬ。

でも、俺はすずが好きなんだ。

・・好きだつて分かつてしまつたんだ。

「分からぬい・・・でも、でもー俺は・・・すずの事好き、だから・  
・・。」

「ー?」

急にすすに手を引っ張られた。

「うううーー！」の声がこぼれやばいかんじにならなかつて、アラウス

「ちょつ・痛い、離せよー。」  
「つっせえ、静かにしてる」  
「つ・・・！」  
やめてよ、すす。やめて、何で?何で怒るの?俺、悪い事した・・・?  
そんなことを考えていたら  
暗くいどこかの部屋についた。  
すすのにおいがして落ち着く。  
すすがこっちを向いた。  
「何・・・?」  
「お前、俺の事好きって言つたよな  
「え・・・?」  
「どつちなんだよ?」  
すすが困ったような顔をして聞いてくる。  
やめて?そんな顔しないでよ。  
でも、すすにそんな事聞かれたら  
やつぱり確信してしまつ。  
すすが好きって事を。  
「好き・・・だよ。俺はすすの事好きだよ?」  
すすがまた悲しい顔をする。  
「でも、さ・・・、お前の好きは俺の好きと意味が違つ・・・だろ  
違つって・・・?」  
「俺の好きは・・・友達としてじゃないんだよ。」  
「・・・じゃあ、どう好きなの?」  
聞いてもよかつたのか。  
もう戻れない、でもその答えを聞いても後悔はしないと思つ。  
「どこでおかしくなつたんだろうな、普通に好きだったのに。いつ

のまにかお前が恋愛対象として好きになつてた。・・・おかしいだ  
ら?」

「・・・おかしくないよ?」

「・・・え?」

「俺、恋愛の好きってどんなのが分からぬいけど。でも俺もすと  
同じ気持ちだから。・・・ドキドキするんだ。心が温かくて・・・  
ドキドキする」

何でだらり、こんなにも温かい。  
俺はおかしいのかな?

「じゃあ……お前は

そつとて俺の頬に手を当てる。

その指が頬をなぞる

「こんな事……されても

そうやつて続けて俺の頬にすずが頬を重ねる。

何でだらつ、急に涙が溢れてきた。

「嫌、じゃない?」

「……っ。

俺は嫌じゃない、なのに涙が溢れて言葉が出ない。  
でも、そのかわりに頭を縦に振る。

「嫌、じゃな、い……っ」

「じゃあ、それだったら……嫌じゃなかつたら……香田から俺と同じことしてよ

俺は頭を横にふる。

別に嫌じゃない。けど……恥ずかしい。

だけど……それですずが喜んでくれるなら。  
でも、やつぱり恥ずかしくて。

すずと同じ事は出来ないけど、俺なりに頑張つて頬に軽く頬をあて  
る。

「・・・そんなんじゃダメ。」

「え・・・？」

「だめ？ 何が？？」

「！？・・・んつ」

急に唇を塞がれた。

急だつたので息がうまく出来なくて口を開けて酸素を取り入れる。そうするとすずが粗つてたかのように舌を入れてきた。

「・・・んつ・・・い、き出来な・・・・つ」

そんなのかまわない、という風にすずは俺の言葉を無視して口腔を探る。

「んつ・・・あつ・・・本・・・とに息・・・できつ・・・」

息をしたい、という事に集中していたのだろうか。

いつの間にか、ソファ（らしき所）に押し倒されていたすずが俺の真上に居る。すずにとつて体制がよくなつたのか

舌がさつきよりも激しくなる。

「あ・・・・ふつ・・・うんつ・・・あ・・・」

唇が離れる。酸素が足りなかつたせいか頭がボーッとする。

真上にはすずの顔があつて・・・一番目に入つてしまつのはすずの唇だつた。

さつきのキスで唇が唾液で濡れていてとても色っぽく見えて・・・

そんな事を考えていると余計に唇から田が放せなくなつてしまつた。

## 65話（前書き）

なんか・・・文章つて難しいねb  
すずがSになつてる^ p^ p^ p^ p^  
書いてる自分が恥ずかしいっていうね^ p^ p^ p

「…………もづ一回して欲しいー?」

すずが悪戯っぽく笑う。

「…………え?」

俺はそんな顔をしていたのだろ?つか。

すずが俺の唇を指でなぞる。

なんだかすずの行動一つでキドキしている自分がいる。下半身が疼いているような感じがして膝を擦り合わせる。

「…………何?もしかしてさつきのキスで感じてる?」

「ち、ちがつ…………!」

ふうん、とすずは言つて俺の服をめくつ上げて肌に手を這わせる。

「つ…………、何する…………?」

「状況的に分からない?」

「なつ…………つて、ちょ…………!」

すずが俺の首筋にキスを落とす。

「んつ…………あ」

すると急にすずが首筋を舐めてきた。

「ふつ、ん…………や、やめつ…………あつ…………!」

今度は首筋を強く吸われる。

そつちつて首筋にキスを落とされしていく中ですずの指が乳首を撫でてくれる。

「やつ…………やめつ…………つ…………んんつ…………!」

「…………声」

「ふ…………んつ…………な…………?」

「声、我慢しないで?」



## 65話（後書き）

あえて「」で終わらせるww  
この続きってかいていいのだろうか?ww  
しかも高校生ってこんなことしますかねww  
だめだめだww

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3606q/>

BL小説（タイトルが決まらない）

2011年12月19日19時56分発行